



茅ふきたより

も く じ

- 01 大内宿茅場の維持保全と会津茅手の技能の継承をはかるための普及啓発事業報告
- 02 茅刈り体験研修
- 03 茅葺き体験研修
- 04 茅葺き文化講座

- 06 「会津茅手の技と風景」記録と聞き書きおよびビデオ制作
- 08 「全国の茅葺き集落と茅刈りと茅葺きの技」パネル展

会からの報告

平成24年度文化庁ふるさと文化財の森システム推進事業普及啓発事業

大内宿茅場の維持保全と

会津茅手の技能の継承をはかるための普及啓発事業報告



▲大内宿集落



▲大内宿茅場

本事業は、会津地方の茅葺き民家および茅葺き文化の存続をはかるため、茅葺きの素材の確保と茅葺き技術の継承に対する理解を深めるとともに、茅場の維持保全活動の支援を行いその共同の輪を広げることと茅葺き技能の継承と後継者育成をはかることを目的に事業を実施した。

これらの基本となる茅刈り体験研修、担い手となる若手職人を対象とする会津茅手の技能講習会、茅葺き文化講座、茅葺きパネル展を行い、また、技能の継承をはかるための会津茅手への聞き取りと、記録を作成し、ビデオとしてまとめた。

この事業の実施にあたっては、文化行政を行う下郷町教育委員会をはじめとし、大内区と重要伝統的建造物群保存地区の大内宿の保存団体である大内宿保存会と、茅葺き技術の継承に取り組んでいる大内宿結いの会など、地域の関係諸団体と連携して事業をすすめた。茅刈り体験研修は、ふるさと文化財の森に選定されている大内宿茅場、茅葺き文化講座とパネル展示は、大内宿町並み展示館（茅葺き技術研修センター）、茅葺き技能研修は旧大内分校を体験研修の場として活用した。

茅刈り体験研修

平成24年11月18日(日)開催

日時 平成24年11月18日(日)

場所 大内宿茅場

(ふるさと文化財の森)

対象 中学生〜一般市民、地元住民

参加者 26名

大内宿茅場において、地元の熟練者の指導のもと、茅刈りの体験研修を行った。手で抱えながら鎌で刈り取り、縄ではなく、茅で束ねる。束ねた茅は5束ずつ、ニューと呼ばれる島立てにして、春まで山で乾かす。春に集落に運んで、茅の保管庫に入れて、屋根葺きに備える。

良質の茅を必要量得るためには、ともかくにも雪の降る前に刈り取る必要があるため、雪国の茅刈りは天候との戦いでもある。茅刈り体験研修を通じて、多雪地帯の大内宿での茅刈りの適期、茅刈り方法、束ね方、乾燥方法、保管方法および茅場の維持管理方法を学ぶことで、ふるさと文化財の森である大内宿茅場を維持するための担い手の育成の一助とすることができた。



▲鎌で手刈り



▲地元の熟練者の指導による茅刈り体験研修



▲刈った茅を立てて乾燥



▲茅で束ねる



▲刈った茅を手に参加者たち



▲ニューにして春まで乾かす

茅葺き体験研修

平成24年11月17日（土）開催

日時 平成24年11月17日（土）

場所 茅葺き研修施設（旧大内分校）

対象 小学生〜一般市民、
若手茅葺き職人

参加者 26名

大内宿では、大内宿結いの会を中心に、茅葺き技能後継者育成のため、大内の茅葺き所有者の後継者の若者を対象に毎週技能講習会を行っている。その研修施設にて、茅葺き職人と若手技能後継者の指導のもと、茅葺きの体験研修を行った。参加者は、大学生、研究者、茅葺き愛好者の他、造園職人、他地域で修行中の若手茅葺き職人の計26名であった。

まず縄結びを学び、茅を並べておしほこで押さえて、足で踏みしめながら、習った縄結びで茅を押さえた。一列葺いたら、ガギ棒で叩き揃える。平葺きの工程を一通り学んだ。

会津茅手の茅葺きの技を市民が体験習得することで、茅葺き文化の理解と関心

を深め、より広くその支援者のすそ野を広げ普及啓発をはかる一助とすることができた。

さらに他地域で修行中の若手職人と造園職人が一緒になり、会津流茅葺きの技能研修を行った。茅葺き職人集団としてよく知られている会津茅手の技を、他地域の若手職人が研修習得することで、多雪地帯の会津茅手の茅葺き技術の理解を深め、大内で研修する若手技能後継者との技術交流の機会とすることができた。

一般市民の中には、茅葺き体験研修を何度か重ねている参加者もあり、次のステップとして中級コースの茅葺き研修の要望もあるので、今年度から開設予定である。



▲出来上がった屋根の上に集合



▲習った縄結びでおしほこをとめる



▲茅を並べる



▲アルキをとめる



▲おしほこの縄を締める

茅葺き文化講座

平成24年11月17日(土) 開催



日時 平成24年11月17日(土)

場所 大内区集会所

対象 一般市民、地元住民、

若手茅葺き職人

参加者 35名

茅場は茅資源の供給地として維持管理がされることで、生物多様性の宝庫となり、近年、その草原としての価値が再評価されている。日本の草原の種類と現状、半自然草原としての茅場の果たす役割や、野焼きが植生に与える影響、その維持保全の意義と方法を主題とした、茅葺き文化講座を開催した。さらに、会津茅手の技術と大内宿でのこれまでの取り組みについて、講座を開催した。

これらによって、参加者および地元住民へ、茅の採集から葺き替えに至る一貫した理解を深めることができ、また、地元住民と参加者が、相互に情報交換と交流をはかることができた。

「半自然草原の役割 — 茅場が

支える日本の生物多様性—」

岐阜大学流域圏科学研究センター

准教授 津田智

生物多様性について

生物多様性の「第一の危機」は、人間がダムなどをつくると、その生き物が住めなくなる。「第二の危機」は、人間の活動の縮小により、自然に対する人間の働きかけが少なくなること、生物が少なくなる。2次林、2次草原は里山、茅場と置き換えることができる。そういうところは人間が手をかけてつくつていくところ。これまでは生物多様性について「第一の危機」が主体と思われてきた。ところが今では「第二の危機」だと言われている。「第三の危機」は人間によってもちこまれた生き物、いわゆる外来種問題。「第四の危機」は地球環境の変化による危機、代表的なのは温暖化問題。

多様性とは

多様性については遺伝子のレベルから種のレベルまで幅広くあるが、種の多様性は簡単に言うと一定の面積にどれくらいの種類の生き物がいるかということ。さらに大きなスケールとしては、山には山の、池には池の動物がいる。山が高くなるとそれによって植物が変化していく。池も深さによって変化していく。山や湖沼以外にも、平地、漬場、干潟、河川などたくさん立地環境が整っていれば、全体の多様性を高く保てる。人間が暮らしていくような里地の多様性がある。草原があって、水田があって、広葉樹、針葉樹があったり、その地域の中にいろいろな生き物がいる。いろいろな環境が維持されることが生物多様性につながるということと同じ。

日本の草原の種類と現状

日本の多くの草原は遷移して森林となる途中の景観ということになる。高山帯などの自然草原という例外もある。さらに人工的につくられている草原。ゴルフ場、公園の芝生、牧草地などがある。また人為的に攪乱してできる草原、2次草原、別名半自然草原とも呼ばれるススキ草原、芝草原、笹草原などがある。

半自然草原の減少と絶滅危惧種

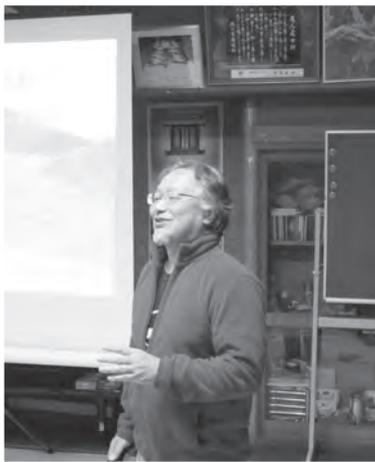
かつて日本では草を資源とし、必要だったから草原を維持してきた。草刈り、

放牧、火入れなどを行い森林に向かう遷移を途中で止める。現状は農業の機械化によって有畜農家がなくなった。昔は家畜がトラクターやトラックの代わりにしていた。これが家畜でなく機械に置き換わった。要するにエサが草でなくガソリンまたはディーゼルになった。また、化学肥料の普及にともなって緑肥がいらなくなり、草原の資源を使わなくなった。半自然草原生態系そのものが絶滅に瀕している。推定によると、今から100年程前は国土の13%程度草原があったが、今では1%を切っている。

半自然草原がなくなると、草原性の植物がなくなる。キキョウ、オキナグサ、スズサイク、サクラソウ、コウリンカなど、絶滅危惧種に指定されている植物には草原性のものが非常に多い。草原性の植物が絶滅することは、草原性の植物をエサとする昆虫も絶滅に瀕する。

野焼きが植生に与える影響

草原に火をいれると、まず植物がなくなり、枯れ草がなくなる。それから熱が発生する。それから炭や灰がでる。主に灰や炭となって栄養源が増加する。炭は黒いが、この黒くなることが重要で、黒化するといい、焼けて開けているので直射日光が当たる。日光が当たる場所が黒化しているので地面の温度が上がる。地面の温度があがると窒素が増える。土壌



中の微生物が活発に活動して土の中に窒素を溜め込む。窒素分は重要な肥料となる。結果として地面の温度があがると窒素が増える。また熱が発生するということは種が発芽する。多くの種は熱に反応する。枯れ草は種の発芽を邪魔しているので、枯れ草が無くなっても種が発芽する。野焼きをすると熱の発生と枯れ草がなくなるにより発芽に対する環境が良くなる。

温度環境と植物

温熱環境について、焼き畑や草原の野焼きなど温度を計っている。霧ヶ峰のススキ草原の計測では、1メートルは40.0℃、30センチは65.0℃、0センチ地表面は30℃、地下1センチまでいったら温度がほとんど上がらない。ススキ草原は70.0℃くらいまでで、ヨシは最高温度は80.0℃、90.0℃くらいになる。芝だと100℃くらい。このように草原の野焼きは地下に温度が伝わらない。ということは春先に火をつけてもススキに影響がなく、春にまた元気にでてくる。原則として地下部は温度が上がらないので、全ての草原性の植物は冬枯れの状態で火をつけてもほとんど影響がない。逆に火をつけることによって種の発芽は促進されるので、種の段階からでてきたものがより一層でる。

「会津流茅葺きと

大内宿の取り組み」

大内宿結いの会 吉村徳男

大内宿が成立したのは1640年と言われている。元々4つあった集落が、1635年に会津の殿様が参勤交代するために間口6〜7間×33間に地割りされ並べられたのが1647年から1648年のこと。

大内茅場は茅場を守るためのふるさと文化財の森に選定されている。茅場の維持管理としては、集落から茅場が近いため、火をつけるのが怖いので、野焼きしないで残りを刈り取っている。保存会長が中心となって村に呼びかけて一戸一人ですて茅刈りをしている。刈った茅はニューにして山に茅を集めて冬を越させて干しておき、春先に屋根に使う。

私は45歳の頃に弟子入りして、9年間修行した。親方から一人前と認められてから、教わる身ではなく、これからは教える立場であると思う、仲間と一緒に廃校になった学校に屋根の一部をつくり、



はじめは縄の結わえ方から始まった。屋根を葺く道具にガギ棒というものがある。これを作ってきたら君たちに教えるよ、と言ったらもの見事に作ってきた。今も水曜日の夜に屋根葺きを学ぶ場を設けている。彼らはほとんど上達して、外にも仕事に行くようになった。去年は国の重要文化財の長床の屋根を葺いてきた。そうした形で屋根を葺く文化を守っている。屋根を葺く技術だけでなく茅場を守ることも、また道具の扱い方も学んでいる。ハサミの研ぎ方まで教えながら、怪我をしないように取り組んでいる。

茅葺き屋根を残していく背景には、村の衣食住のいろんな文化がある。茅葺きがあることによって、そういう文化が残る。人と人が縦だったり横だったり斜めだったり繋がついていく。大内には若い人が長男として残っている。そして結婚する、子供が生まれる、そうすることで家の連続性が生まれる。大内宿は300年も家が成り立ってきたから、自分たちがその連続性を途絶えさせないためには、この集落を守ってここの経済活動ができて、子供たちができて、というようなことを考えて茅葺きを守ってきた。

この村ではそれぞれに役割があって、子供たちも役割を任されているので、村の一員としての意識が備わってくる。親

たちも意識してそのようにやらせている。村でもっている教育力、そういうものを無くさないようにやっている。

我々は茅葺き屋根だけを残すのではなく、自然という景観、農という景観があってこの村が生きてくると思っている。農というのは人が生きていく証。

大内宿には秋になると人がたくさん訪れる。この裏側には、村人が表の用水路を掃除する、茅葺き屋根を守る、とか地道な活動がある。だからこそこの村はきちんと残っているし、俺たちは自信を持って日本、世界の人にいいところだと働きかけることができる。

最後に風評被害で昨年は本当に人が少なかった。考え方として、俺たちはがんばろうでなく、福島に来てくれる人に感謝の気持ちを持ってばもっと新たに前を向けるのではないかと考えている。うちの青年たちがすばらしいのは、去年、朝4時に起きて7時までポンプ操法の練習をやって10分でご飯を食べて、そこから喜多方まで1時間かけて行き、屋根葺きをやって17時から帰ってきて19時から祭りの太鼓の練習と笛の練習をする、それを繰り返し1ヶ月間やった。彼らはすばらしい。私たちはミッションやビジョンでなく一番大切なのはミッション、情熱なんだと、情熱さえあればなんでもできる。

「会津茅手の技と風景」
記録と聞き書きおよび
ビデオ制作

日時 平成24年10月〜平成25年3月
場所 大内宿町並み展示館

(茅葺技術研修センター)の
葺き替え現場他

大内宿町並み展示館(茅葺技術研修センター)の葺き替え現場他、会津の茅葺きを記録するとともに、会津茅手から聞き書きを行った。これらを「会津の茅葺き技と風景」としてビデオにまとめた。



▲棟仕舞 ぐしに杉皮を巻きおさえる



▲掛矢で叩き締めていく



▲ぐしの完成を祝うぐしまつり

会津茅手 聞き書き

佐藤恒雄さん(78)

昭和10年生まれ 只見町

屋根葺きの仕事

20歳頃から屋根葺きの仕事を始めた。親方は父の弟で当時40代だった。親の代から長男は跡を継ぐと決まっていたから農業を継いで、農業の合間に出来る仕事として屋根葺きを選んだ。この辺りの屋根葺き職人は春先の4月の一ヶ月しか屋根葺きをしない。この頃は雪が残っているから、雪の上に足場をかけていた。町内の2〜3軒を葺いたら、その年の屋根葺きは終わり。あとは農業。自分は出稼ぎには行かなかった。大工は新潟から来ていたが、屋根葺きは来なかった。昔は3〜4年で年季明け。年季奉公が1年。自分はおじさんが親方だったから、年季奉公はなかった。30年くらい屋根葺きをしてやめていたが、だんだん職人がいなくなつてまた再開し、去年卒業した。



昔は屋根葺きの日当は大工の2割増しだった。

1年の暮らし

3〜4月 屋根葺き

5月 田植え

5、6月 ゼンマイ採り、土建業等

9月 稲刈り

11月 茅刈り

11月〜3月 冬仕事

茅刈り

村には山裾にカヤカリバがあった。毎年1軒分ずつ村で決めて、屋根葺きに使った。秋の11月の初雪前に1戸1〜2人出て、茅刈りをした。茅を刈ったら稲藁で直径20センチくらいに束ねていた。刈ったらカヤカリバの中にカヤマキに巻いて置いておく。春4月頃になったらソリで雪を利用して人力で葺き替える家まで出してきた。そして屋根を葺いた。カヤカリバは代々使ってきたが、昭和40年代に使わなくなった。今は荒れ果てて木も生えている。6尺縄で束ねたのを1シメという。

技

昔は葺き替えが主。頼まれれば差し茅もやったが、ほとんどは全部ほぐして葺き替え。軒先には麻殻を使って、それはあまり傷まないから取り替えない。屋根に藁は使わない。茅だけ。屋根葺きで一番気を使っているのは、持ちと格好。

会津茅手 聞き書き

小山忠男さん(70)

昭和16年生まれ 下郷町

屋根葺きの仕事

17歳から修行に行った。親方は親戚で、白河に出稼ぎに行つて仕事を覚えた。農家の長男は家を守るといふ習慣だったし、自分の家も草屋根だったから、それを守るために習いに行った。出稼ぎには12月から3月の彼岸前まで行った。彼岸にみんなが出稼ぎから帰ってきて雪がなくなると、春にはみんなで結いで村の屋根葺きをした。毎年4軒くらいずつ屋根葺きをした。全部葺き替えるのではなく、3分の1か半分くらいずつ。1年の暮らし

3月半ば たばこの種まき

4月 結いで屋根葺き

米の苗づくり



5月連休 たばこを畑に移植

6月 田植え

7月半ば〜8月末 たばこ収穫

9月 たばこを乾燥

10月 たばこの選別

10月末〜11月 稲刈り

11月半ば 茅刈り

12月 たばこ専売

12月〜3月彼岸 出稼ぎ

茅刈り

茅刈りは11月。個人でも茅刈りをしたが、集落にカヤカリバという山があった。集落で組合をつくって、毎年2軒分ずつくじで茅が当たるしくみだった。茅刈りは1戸1人出てやる。5把が1束で、それを立てて乾燥させた。2週間くらい乾かすと雪が降る前に、当たった家まで運んだ。背負って運ぶか馬で運んだ。この共有のカヤカリバは1町5反くらいで150ダンくらいとれた。1把は直径15〜20センチくらいで5把が1束、6束が1ダン。昔の茅はよく乾燥していて固くて丈夫で持ちがよかった。30〜40年持った。

技

タルキやヤナカ、オシボコなど、すべて木を使う。軒先にはハダツケに麻殻を使った。一番難しいのは軒先。屋根は全部違うから、やれなくなるまで勉強だと思つてやっている。

会津茅手 聞き書き

馬場竹一さん(80)

昭和7年生まれ 南会津町(旧伊南村)

屋根葺きの仕事

15歳の頃から仕事を始めた。親方は南郷村の従兄。冬は栃木の屋根葺きに出稼ぎに行つた。30年くらい行った。11月末から2月半ば頃まで。2〜3ヶ月くらい。旧正月の頃に帰ってきていた。行くときはバスと汽車で行つたが、帰りはまだ雪が残っているので、田島から伊南まで歩いて一日かけて帰ってきていた。3月の彼岸を過ぎると地元の屋根替えが始まった。栃木に出稼ぎに行つたのは、昭和40年から45年頃まで。その頃には栃木にも草屋根がだんだんなくなつてきた。この頃に出稼ぎの屋根葺きはやめたが、地元の屋根葺きはちよこちよこ頼まれてやっていた。その頃は差し茅だった。1年の暮らし

2月旧正月明け〜3月 薪出し



3月彼岸すぎ〜4月 地元の屋根葺き

4月 山焼き(茅場)

5月 杉起こし(山仕事)

5月 山菜採り

5月末 田植え

夏〜秋 土建業など

9月彼岸すぎ 稲刈り

10月末〜11月 茅刈り

11月末〜2月旧正月 出稼ぎ

茅刈り

集落の茅場が20〜30町歩あったので、秋の10月末から11月に1戸1人出て茅刈りをした。3束1シメで6尺の縄でちょうど1シメ。50坪の家の屋根葺きにだいたい200〜300シメ必要だった。その他にも自家用の茅場を持っていて、牛の踏み草用に秋に刈り取っていた。オシボコには、アカギやマゴサク(マシサク)、ウルシの若木をつかった。官地などで材木を出した後にちよこちよこいい具合に柴がたった。

技

軒先には麻殻をつかった。昔は麻をつくって織物をつくっていたから、どこの家でも麻殻を天井にしまつて貯めておいた。タルキは昔はナラや雑木だった。それからスギになった。カヤオイも雑木。タルキの上にはヨシを並べた。昔はくれぐしや杉皮を被せたぐしだった。

「全国の茅葺き集落と茅刈り」

茅葺きの技」パネル展

平成24年11月17日(土)～12月24日(月)開催

日時 平成24年11月17日(土)
～12月24日(月)

場所 大内宿町並み展示館
(茅葺き技術研修センター)

対象 一般市民、地元住民、観光客
(ふるさと文化財の森センター)

来場者 延べ 2815名

全国の主要な茅葺き民家、集落、茅刈り、茅葺きの技について、「伝えよう茅葺きの文化と技術 茅葺き民家とその風景」と題してパネル展を開催した。全国各地の茅葺き集落やその技の写真によって、材料や葺き方、屋根のかたちの違いを比較できるパネル展とした。
一般の観光客にも広く公開して、茅葺き文化に親しみ、理解を深めるための普及啓発をはかることができた。



▲全国の茅葺き屋根を見比べる



▲パネル展の様子



▲会津の茅葺き 大内宿



▲展示会場 大内宿町並み展示館 (ふるさと文化財の森センター)

〈編集後記〉

ふるさと文化財の森普及啓発事業を通じて、各地の茅刈りや茅葺きの技を学び、なにより地元の方達と共に活動できることが大きな喜びです。また来年も会いましょうと、各地に茅葺きの輪が広がることが願います。(弥)

茅ふきたより 第10号

2013年3月31日発行 (非売品)

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会

編集：茅ふきたより編集委員会

一般社団法人日本茅葺き文化協会

〒300-4231 茨城県つくば市北条184

TEL/FAX 029・867・5829

E-mail info@kayabun.or.jp

URL http://www.kayabun.or.jp

◎みなさんの情報をお寄せ下さい！

茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。

茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。

宛までお寄せ下さい。